『リス・ネズミハンドブック』

松飯島正広・土屋公幸 著

2015 年 4 月　文一総合出版　発行

88 頁

定価（本体 1,300 円＋税）

垣内京香・浅川満彦（酪農学園大学獣医学類）

酪農学園大学野生動物医学センター WAMC に分属希望のゼミ

生は，相当強固なアンビションを抱いているので，指導教員の浅川は，それなりの覚悟を決めて対峙しなければならない。分属決定の初夏は，教員・学生双方，そのような緊張感が伴う季節なのである。今年も臨戦態勢でこの季節を迎えたが，1人，小哺乳類を研究課題にしたいという学生がゼミ生として所属したことから，だいぶ，心が緩和した。内部寄生虫の生物地理をライフワークにしている浅川にとって，小哺乳類，特に，野ネズミ類は極めて優秀な材料であるので，お馴染みなのである。本書籍紹介拙文の共著者，垣内は幼少期からハムスターを愛玩動物としていたことが原因のようだ。それならば本書をどのように読みこなすのであろうか。（文責 浅川）

本書は小さなハンドブックである。日本に生息するリス・ネズミの仲間（哺乳類）の全て（31種）が掲載されており，生態の観察や，骨や食痕などによる種類の識別に役立つような構成となっている。各種類の頁には，和名，学名・英名，全体写真，部分アップ写真（個体の識別に重要な部位のもの），頭骨写真，生息環境，食痕などが掲載されている。野外で活動している様子の写真も多数あるため，実際にどのようなに生活しているのかをイメージしやすい。また，その他にも，リス・ネズミの各部位の名称，げっ歯類の外形による検索頁，頭骨原寸大一覧なども掲載されている。各部位の名称では，頭骨や歯などの細かい部位の名称まで記載されており，これから学び始める初心者にも分かりやすくなっている。外形による検索頁は，ある齧歯類の歯，尾，体毛の特徴などをフローチャートでたどっていくと属が分かるという構造である。こちらも，分かりやすく簡単に属の特定ができるようになっている。

本書の一番の魅力は，リスやネズミの生態写真が多数掲載されていることである。例えばニホンリスの頁には，地面を掘っている様子や，子どもをくわえて走り回る様子，クルミをかじって中身を食べている様子など，躍動感溢れる写真がある。普段見られない野外での活動の様子は興味深く，引き込まれてしまう。エゾシマリスの頁には，ほお袋の内側に食物をたくさん詰めた写真や，冬眠に備えて枯れ草を運ぶ写真がある。これらを見ると，彼らも食事や住居のために知恵を使って生活しているのだと知ることができ，愛おしく思える。また，ムササビやモモンガの頁には，滑空している最中の写真も掲載されている。小さな体でありながら，滑空している姿は迫力があるため，必見である。

写真だけではなく，文字の情報量も充実している。それぞれの種類ごとに，頭骨の特徴なども丁寧に解説されている。例えばアカネズミでは，脳頭蓋が丸い，吻が細長い，鼻骨が長い，上顎第2臼歯は大きいが第3臼歯は小さい，といった内容が頭骨の写真と共に掲載されている。生育環境などの解説も多数載っている。本書は，図鑑として活用できるだけではなく，リスやネズミの魅力を伝えてくれる1冊である。読めば間違いなく，彼らの生活を身近に感じられるであろう。（文責 垣内）

垣内の齧歯類愛はある程度判ったと思う。しかし，本書について重要なことが欠落していた。それは鳴き声の記載である。類書をいくつか比較すれば，直ぐに気が付いたはずであろう。彼女には今後の研鑽に期待したい。野ネズミ類の鳴き声を種鑑別の1つとして注目したのは，本書著者・土屋公幸博士である。長年，国内外の多数野ネズミ類が，宮崎医科大学（現・宮崎大学医学部）の実験動物施設で飼育し，生きた個体と向き合ってきたからこその賜物である（注：本書末尾の著者略歴にはその前職の記述欠落）。浅川には関連した逸話がある。90年代初頭，土屋博士からハントウアカネズミ（本書カラフトアカネズミ）捕獲依頼を受けた。後で教えてもらったのだが，東海大学出版会刊『日本の哺乳類』に生体写真を掲載するのに，当時，宮崎の施設にはこの種がいなかった。ちょうど，浅川はサロマ湖砂嘴で確認したばかりなので快諾したが，勤務先（江別）からは相当遠い。それならば，早来町にある馬牧場周辺の耕作地（57頁の環境写真参照）が良いと告げられ，さっそく，大きめの *Apodemus* が捕獲できた。が，生きたままではアカネズミとの鑑別が難しい。電話報告したところ，鳴き声をききたいという。アカネズミとは異なり，ハントウアカネズミは盛んに鳴くのだという。訝りつつ，電話口でその個体を鳴かせてみたが…。無口ではあったが，元気なうちに㈱日本通運の生体輸送に委託し，宮崎まで送り届けた。その雄姿はハントウアカネズミとして『日本の哺乳類』に，無事，掲載。しかし，その本には鳴き声については記載されてはいなかったし，その後の改訂版にも見当たらなかった（前述の通り）。おそらく，満を持しての鳴き声紹介を本書で行ったのであろう。この種のほか，北海道のヤチネズミ類 *Myodes* 属各種もそれぞれ特徴的な鳴き声を有するという（32～37頁）。一方，本州陸塊産の *Eothenomys* は鳴かないようだ（86～87頁）。近い仲間内で鳴き声をする・しないというのは，どのような生態的意義が有るのだろう。幸い，土屋博士は江別に近い石狩太美の私設研究施設にいらっしゃるので，近いうちに，小哺乳類好きの新人を連れ，論議をしに行きたい。（文責 浅川）